

自分の呼称の変化の縦断的検討

Longitudinal examination of changes in self-pronouns

長田 瑞恵¹⁾

NAGATA Mizue

要 旨

自分の呼称（以下「自称詞」と呼ぶ）は自我の発達を表すものの一つと考えられる（西川，2003）。話し手が使用する自称詞の獲得や変化が相互作用者に影響を与え、それが翻って話し手への聞き手の行動に影響を与えるという双方向的関係が考えられ（e.g., 長田，2010，2013），社会の中で生活する子ども達という観点からも，自称詞の獲得や発達はより詳細な検討が必要である。そこで本研究では，自称詞の獲得及び使い分けの縦断的発達の実態について，幼児期から中学生までを対象に，自我の発達との関連という観点から検討した。その結果，以下の点が明らかとなった。第1に，幼児期3年間は三人称を使って自分を呼び表す子どもが圧倒的に多く，その後その割合が減少していくが，中学校になっても一定割合存在し続けることが示された。第2に，一般的自称詞の使用については，幼児期に顕著に使用者が増えた後，小学校低学年では目立った変化がないが，小学校高学年で再度使用者の増加傾向が示唆され，中学校になるとほぼ全ての子どもが一般的自称詞を使用することが示された。第3に，自分の呼称を場面や相手によって使い分ける人数は幼児期でのみ違いが見られ，年長児クラスが年中児クラス・年少児クラスのいずれよりも人数が多いことが示された。第4に，自称詞の獲得と自我の発達との間に関係があることが示されたが，発達段階によって両者の関連の仕方や程度が異なっていた。以上の結果は，これまで縦断的及び広範囲の年齢に亘って検討されることがなかった自称詞の獲得を明らかにしている点，自称詞の獲得と自我の発達との関連性を示した点で意義があると考えられる。今後の課題として，自称詞の獲得や使い分けの変化と心の理解の発達との関係の検討が挙げられる。

I はじめに

自分の呼称（以下「自称詞」と呼ぶ）は自我の発達を表すものの一つと考えられる（西川，2003）。子どもたちは2歳過ぎから主に自分の愛称（三人称）を名乗って他者との区別を明確にし（西川，2003），3歳頃から三人称で呼ぶのをやめ一人称代名詞を用いるようになるとされる（Wallon，

¹⁾ 十文字学園女子大学教育人文学部 幼児教育学科

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University
キーワード：自分の呼称，自称詞，三人称，呼称の使い分け，縦断的検討

1956/1983)。これまでの筆者の研究から、話し手が使用する自称詞の種類（さまざまな一人称代名詞、固有名詞など）によって聞き手が話し手に持つ印象が異なり、その後の聞き手の行動が影響を受けること（e.g. 長田, 2010, 2013）が明らかになっている。この研究結果を踏まえると、話し手が使用する自称詞の獲得や変化が相互作用者に影響を与え、それが翻って話し手への聞き手の行動に影響を与えるという双方向的関係が考えられ、社会の中で生活する子ども達という観点からも、自称詞の獲得や発達はより詳細な検討が必要である。

このような背景を踏まえ、本研究では以下の問題点を検討する。

第1に自称詞の獲得及び使い分けの縦断的発達の実態の検討が必要である。幼児期においては男児の方が自分を「おれ」などの一人称自称詞で使用し始める時期が早いこと（西川, 2003）が報告されている。しかし、実際に自称詞がどのように獲得され使い分けられていくのかについて、縦断的に発達的变化を検討した実証的研究は存在しない。

第2に、自称詞の獲得に関する研究は幼児期や青年期を対象としたものが大半であり、小学生や中学生を対象とした研究は少ない。しかし、自我の発達や他者視点の獲得という観点から考えれば、社会的比較が可能となる小学生や、思春期に入り自我同一性の確立が課題となり始める中学生まで幅広い年齢を対象とした研究が必要である。

第3に、自称詞の獲得及び使い分けと自我の発達との関係の検討が必要である。自称詞の獲得・使い分けには自分とは異なるものとして他者を区別できるという点で、自己概念すなわち自我の発達が関連していると考えられる。すなわち、他者とは異なるものとして、場面ごとでの自己の役割についての認識の発達が重要な要因として関連していると考えられる。特に、どのような自称詞を話し手が使用するかによって、聞き手の話し手に対する印象形成や関わりが影響を受けることから（e.g. 長田, 2010, 2013）、自称詞の使用と自我の発達との関連について検討することは社会適応的に重要な意義をもつと考える。

II 手続き

(1) 協力者 2016年の時点での3歳児（年少児）クラス、小学1年生、小学4年生、中学1年生で、2017年の時点ではそれぞれ4歳児（年中児）クラス、小学2年生、小学5年生、中学2年生になっていた。同様に2018年の時点ではそれぞれ5歳児（年長児）クラス、小学3年生、小学6年生、中学3年生になっていた。3年分の縦断的データが収集できた幼児47名、小学校低学年33名、小学校高学年30名、中学校131名を分析対象とした。

(2) 材料 質問紙を使用した。幼児と小学生については本人の回答は難しいと判断し、実際の回答は協力者の保護者に依頼した。中学生には協力者本人に記載を依頼した。2016年では相互作用相手を設定して、それぞれで最もよく使用する自称詞を記載してもらった。小学生と中学生に対しては、「人は自分自身を呼ぶときに、様々な言葉を使います。例えば、『わたし』『あたし』『わたくし』『ぼく』『おれ』『自分』『うち』『自分の名前』『ニックネーム』などがあります。あなた（お子様）は、次の場面で自分自身を呼ぶときに、どのような言葉を使いますか？複数ある場合には最もよく使うものに○、時々使うものに△をつけてください。」という指示に続いて、「友達といる場面」、「家族といる場面」、「先輩といる場面」、「後輩といる場面」、「先生といる場面」、「目上の人（勤務先の上司など）といる場面」、「見知らぬ人といる場面」について、選択肢として「わたし」、「あたし」、「わたくし」、「ぼく」、「おれ」、「自

分]、「うち」、「自分の名前」、「ニックネーム」、「その他」から選択してもらった。幼児に対しては、「お子様のご家族やお友達に対して、自分のことをどう言っているのかお教えてください。言い方が複数ある場合には全てお書きの上、もっともよく使われるものに○印をおつけください。」という教示に続いて、「父に対して」、「母に対して」、「兄・姉に対して」、「弟・妹に対して」、「仲良しの同性のお友達に対して」、「仲良しの異性のお友達に対して」、「保育園の担任の先生に対して」、「保育園の園長先生に対して」、「見知らぬ同年代の子どもに対して」、「見知らぬ大人に対して」について、自由記述で自分自身を何と呼ぶかを記載してもらった。

2017年と2018年の質問紙には、2016年の質問項目に加えて、自己概念の発達を調査するために、原

Table 1 自我の発達：5段階

| | 下の事柄についてご自分（お子様）に当てはまる程度を5段階のうち、一つだけお選びください。 | 下位尺度 （*逆転項目） |
|-----|---|-----------------|
| 1. | 周りから決められた役割が困難なことでも、すぐにあきらめたりせずに、我慢してやりとおす。 | 根気我慢 |
| 2. | 皆でやるべき課題があるときは、遊びたい衝動に駆られても我慢できる。 | 根気我慢 |
| 3. | 嫌なことがあっても、人やものに八つ当たりをしない。 | 情動抑制 |
| 4. | 自分が考えていることを相手にわかるようにはっきり言う。 | 自己主張 |
| 5. | 自分が気に入らない人には、つい過剰に注意をしたり、文句を言いすぎてしまう。 | 情動抑制* |
| 6. | 相手から不快なことを言われても、自分の感情を露骨に表したりはしない。 | 情動抑制 |
| 7. | 集団の中で、自分の決められた役割があるときは、どんな誘惑にも負けずに取り組む。 | 根気我慢 |
| 8. | やりとおさなければならぬ仕事があるときは、どんな誘惑があっても最後までやりとおすことができる。 | 根気我慢 |
| 9. | 納得のいかないことがあったとき、すぐにかんしゃくを起こしたりせず、落ち着いて話すことができる。 | 情動抑制 |
| 10. | 自分がされて嫌なことは人にもしない。 | 情動抑制 |
| 11. | 友達から間違いを指摘されたら、素直に自分が間違っていたことを認める。 | 情動抑制 |
| 12. | 周囲の人と自分の意見が違っていても、自分の意見を主張する。 | 自己主張 |
| 13. | 自分の考えだけを聞いてもらおうとするのではなく、相手の考えも聞いて、分かってあげようとする。 | 情動抑制 |
| 14. | 話し合いの場で、進んで自分の意見を述べる。 | 自己主張 |
| 15. | 困難なことでも集中して取り組む。 | 根気我慢 |
| 16. | たとえ言いにくくても、間違っていることは指摘できる。 | 自己主張 |
| 17. | 友達の考えに流されることなく、自分の考えを言うことができる。 | 自己主張 |
| 18. | 自分の思い通りに行かないと、すぐに不機嫌になる。 | 情動抑制* |
| 19. | 多数派の意見とは違って自分の意見を言う。 | 自己主張 |

田・吉澤・吉田（2008）の自己主張尺度と自己抑制尺度，根気我慢尺度から成る社会的自己制御尺度への回答を求めた。Table 1に自我の発達尺度を示す。

(3) 手続き 質問紙の配布と回収は協力者が通園・通学する教育機関を通して行った。まず教育機関長に研究協力依頼をし，研究協力が強制でないことを口頭で伝え，事前に質問紙のサンプルを送った後に研究協力への同意が得られた場合に，質問紙を協力機関の施設長宛てに郵送した。質問紙と共に，研究概要を書いた説明書と研究協力同意書を同封し，返送用の封筒も同封した。質問紙と同封した研究協力同意書には，研究の内容についての説明と同時に，研究への協力を同意した人のみ質問紙への回答を依頼する旨を明記し，協力するか否かを回答する部分に協力意思の有無を記載したものの回収も依頼した。質問紙を対象者へ配布・回収する際も協力を強制するような働きかけはせず，単に配布のみが行われるように事前に各施設長に依頼した。回収は，各教育機関の都合に応じて行うように依頼した。質問紙は，必要事項を記入後，回答者が質問紙を封筒に入れ，それを教育機関が著者に返送するように依頼した。

(4) 分析 質問紙の回答をもとに，①使用する自称詞の変化，②自称詞の使い分けの有無の変化，③自称詞の使用状況と自己概念の発達との関連の3点の発達の变化を分析した。自己概念の3側面は側面ごとに平均値を算出し，分析に用いた。統計的検定にはIBM SPSS Statistics ver.26を使用した。

(5) 倫理的配慮 本研究は対象が人であるため，事前に本学研究倫理審査委員会に研究計画及び質問紙概要を提出し，倫理的配慮に問題がないとの承認を得ている（承認番号 2016-008, 2017-026, 2018-20）。

Ⅲ 結果

(1) 使用する自称詞の変化

自分の呼称の変化に関しては，対応のある人数データの偏りの検定としてノンパラメトリック検定であるCochranのQ検定を使用した。

(1) - 1 三人称の使用

まず，自分の呼称として自分の名前やニックネーム（以降，「三人称」と表記する）を一回でも挙げた人数を幼児期3年間，小学校低学年3年間，小学校高学年3年間，中学校3年間で集計した。Figure 1からFigure 4に結果を示す。

幼児期3年間は，年少クラス，年中クラス，年長クラスを通して，三人称を使って自分を呼び表す子どもが圧倒的に多く，その傾向はほぼ変わらないことが示された。小学校低学年3年間は，CochranのQ検定の結果 $Q=7.60$ ($p<.05$) で人数の割合に偏りがあることが示された（1年生 $>$ 3年生）。小学校高学年3年間は，CochranのQ検定の結果 $Q=12.00$ ($p<.01$) で人数の割合に偏りがあることが示された（4年生 $>$ 5年生・6年生）。中学校3年間は，三人称を使って自分を呼び表す子どもが4割程度存在し，その割合は3年間でほぼ変わらないことが示された。

(1) - 2 一般的自称詞の使用

自分の呼称として社会一般的に使用される自称詞（以下「一般的自称詞」）を一回でも挙げた人数を幼児期3年間，小学校低学年3年間，小学校高学年3年間，中学校3年間で集計した。Figure 5からFigure 8に結果を示す。

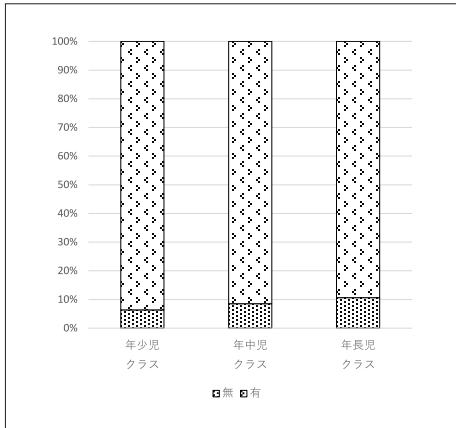


Figure 1 三人称を使用
(幼児期3年間)

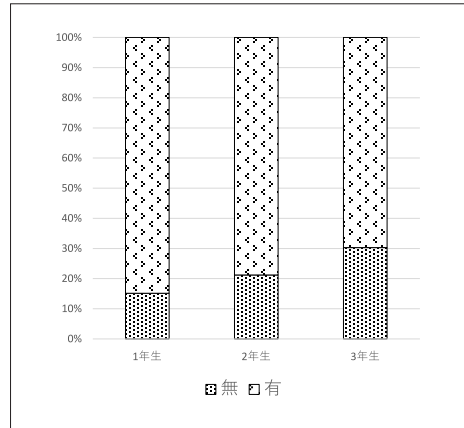


Figure 2 三人称を使用
(小学校低学年3年間)

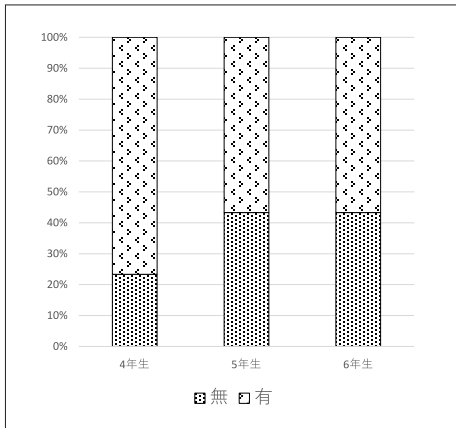


Figure 3 三人称を使用
(小学校高学年3年間)

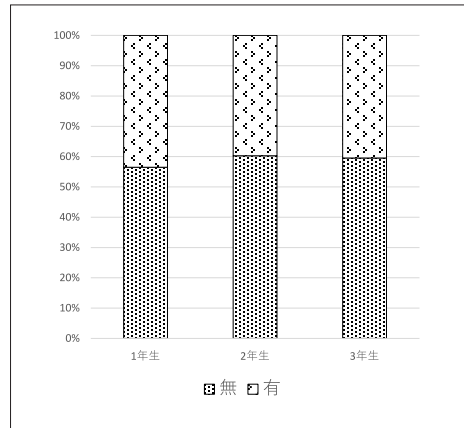


Figure 4 三人称を使用
(中学校3年間)

幼児期3年間では、CochranのQ検定の結果 $Q=8.45$ ($p<.05$)で人数の割合に偏りがあることが示された(年少児<年長児, 年中児 \leq 年長児)。小学校低学年3年間については、CochranのQ検定の結果、学年による人数の違いは有意ではなかった。小学校高学年3年間については、CochranのQ検定の結果、人数の違いには有意傾向があったが($Q=4.46$, $p<.10$), 下位検定の結果、学年間に有意な人数の違いは示されなかった。中学校3年間についてはほぼすべての協力者が一般的自称詞を使用していた。以上の結果から、一般的自称詞の使用は幼児期から小学校低学年を通して増えていき、中学校になるとほぼすべてが一般的自称詞を使用することが示された。

(2) 場面による自分の呼称の使い分けの変化

自分の呼称を場面や相手によって使い分ける人数を幼児期3年間, 小学校低学年3年間, 小学校高学年3年間, 中学校3年間で集計した。Figure 9からFigure 12に結果を示す。幼児期では、CochranのQ検定の結果 $Q=7.00$ ($p<.05$)で人数の割合に偏りがあることが示された(年少児・年中児<年長児)。小学校低学年, 小学校高学年, 中学校では、CochranのQ検定の結果、いずれも学年による人数の違い

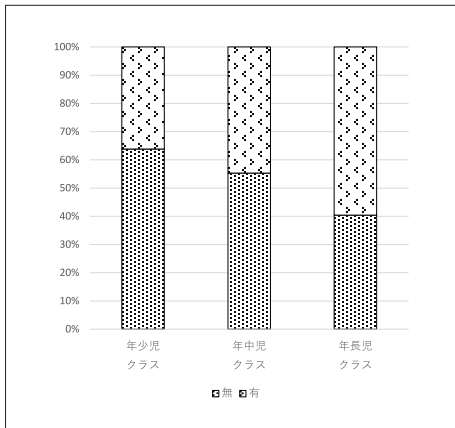


Figure 5 一般的自称詞を使用
(幼児期 3年間)

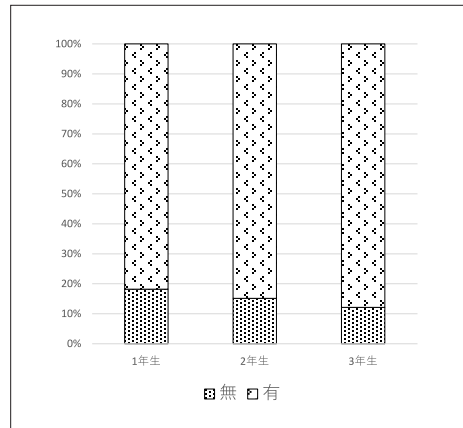


Figure 6 一般的自称詞を使用
(小学校低学年 3年間)

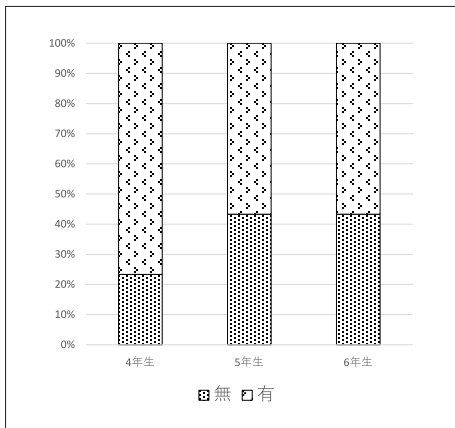


Figure 7 一般的自称詞を使用
(小学校高学年 3年間)

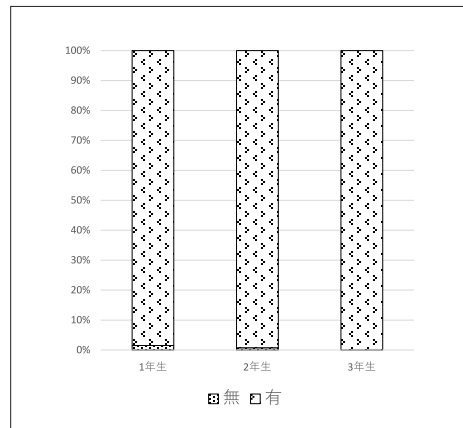


Figure 8 一般的自称詞を使用
(中学校 3年間)

は有意ではなかった。

以上の結果から、幼児期の後半に自称詞の使い分けが始まり、以後、徐々に使い分けを行う人数が増え、中学校では約9割の子どもが自称詞の使い分けをすることが示された。

(3) 自称詞の獲得及び使い分けと自我の発達との関連

2016年時点、2017年時点、2018年時点での自称詞の獲得状況や使い分けが、2017年時点と2018年時点の自我の発達と関連するの否かを検討した。なお、反復測定分散分析の中で、本研究の中心的目的である自称詞に関連する変数を含まない交互作用については、紙面の制約上、下位検定の結果の記載を割愛する。また自我側面の主効果の下位検定にはBonferroniの方法を用いた。

(3) - 1 三人称の使用と自我の発達との関連

(3) - 1 - 1 2016年時点での三人称の使用と自我の発達との関連

2016年に三人称を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした三人称自称詞使用有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分

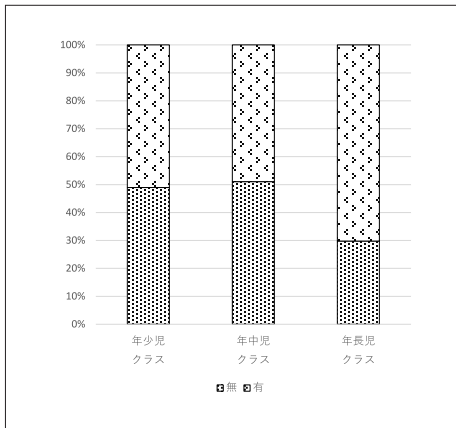


Figure 9 使い分けの有無
(幼児期3年間)

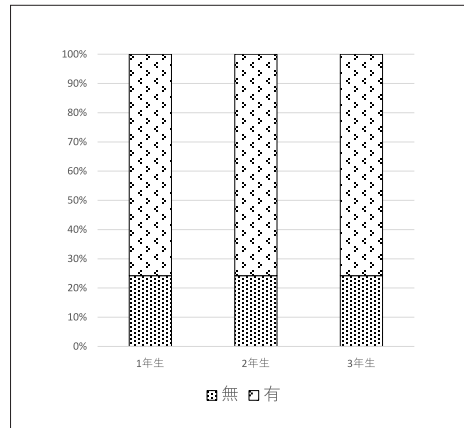


Figure 10 使い分けの有無
(小学校低学年3年間)

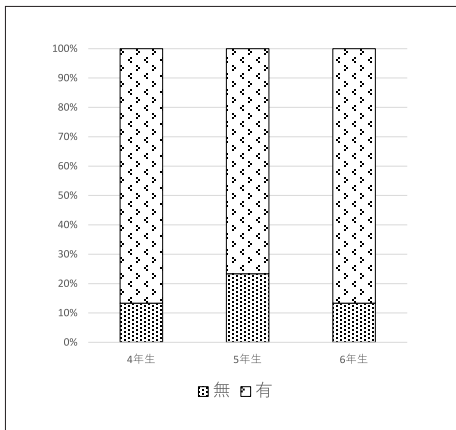


Figure 11 使い分けの有無
(小学校高学年3年間)

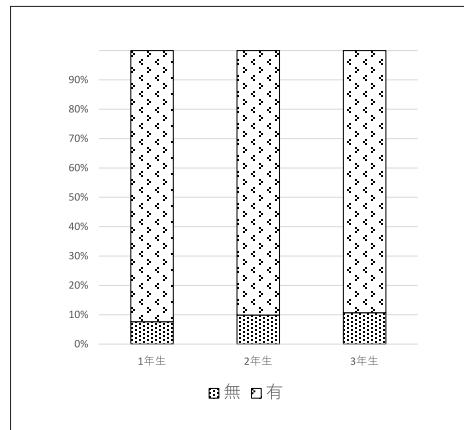


Figure 12 使い分けの有無
(中学校3年間)

析を小学校高学年、中学校の各時期において行った。なお、Figure13からFigure34までの縦軸の単位は自我の3側面ごとの評定平均値の得点を表す。幼児期と小学校低学年においては三人称を使用しない人数が少なく統計的検定が行えなかった。小学校高学年においては (Figure 13), 自我の主効果が有意であった ($F(1, 56) = 11.37, p < .01$, 根気我慢・情動抑制 > 自己主張)。さらに三人称の使用の有無の主効果が有意であった ($F(1, 28) = 5.10, p < .05$, 三人称有 > 三人称無)。中学生においては (Figure 14), 自我の主効果が有意であった ($F(2, 254) = 43.81, p < .01$, 根気我慢 > 情動抑制・自己主張)。

以上のことから、小学校高学年では、2016年時点で自分の呼称として三人称を使うか否かと2017年と2018年の時点の自我の発達との関連が示され、三人称を使う子どもの方が自我の発達が進んでいることが示された。

(3) - 1 - 2 2017年時点での三人称の使用と自我の発達との関連

2017年に自分の呼称として三人称を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした三人称自称詞使用有無 (2) × 時期 (2) × 自我側面 (3) の3要

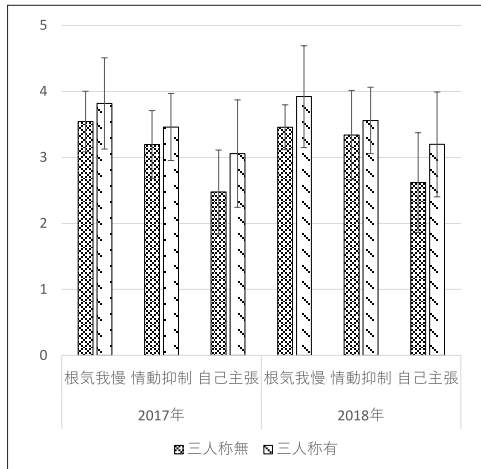


Figure 13 2016年三人称の有無と
自我3側面（小学校高学年）

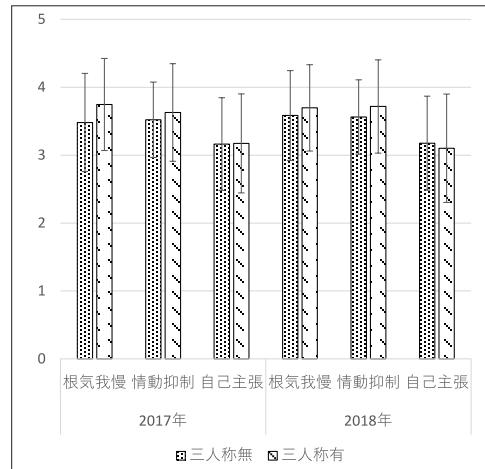


Figure 14 2016年三人称の有無と
自我3側面（中学校）

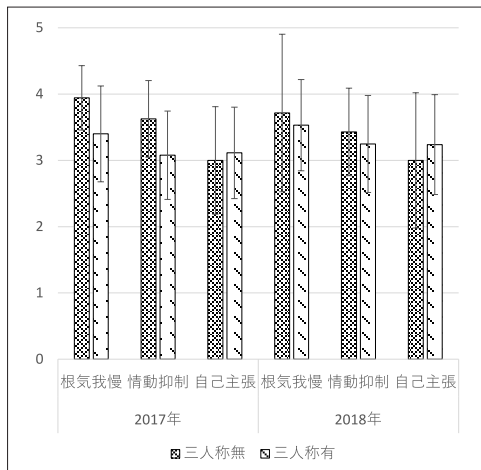


Figure 15 2017年三人称の有無と
自我3側面（小学校低学年）

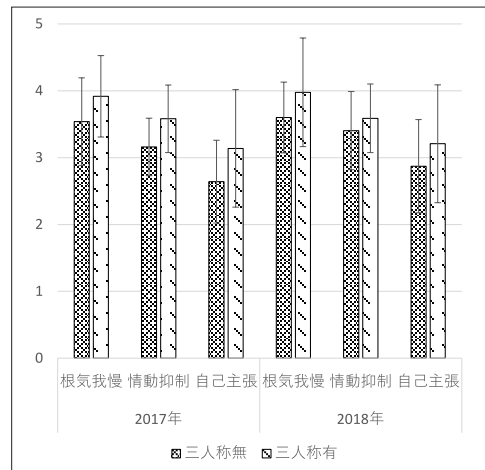


Figure 16 2017年三人称の有無と
自我3側面（小学校高学年）

因反復測定分散分析を幼児期，小学校低学年，小学校高学年，中学校の各時期において行った。ただし，幼児期においては三人称を使用しない人数が少なく統計的検定が行えなかった。小学校低学年においては（Figure 15），自我の主効果のみ有意であった（ $F(2, 62) = 5.60, p < .01$ ，根気我慢 > 自己主張）。小学校高学年においては（Figure 16），自我の主効果が有意であった（ $F(2, 56) = 13.27, p < .01$ ，根気我慢 > 情動抑制 > 自己主張）。また，時期の主効果も有意であった（ $F(1, 28) = 8.60, p < .01$ ，2018年 > 2017年）。さらに，三人称の使用の主効果が有意であった（ $F(1, 28) = 6.10, p < .05$ ，三人称有 > 三人称無）。中学校においては（Figure 17），自我の主効果のみ有意であった（ $F(2, 254) = 45.28, p < .01$ ，根気我慢 > 自己主張）。

以上のことから，小学校高学年では，2017年時点で自分の呼称として三人称を使うか否かと2017年と2018年の時点の自我の発達との関連が示され，三人称を使う子どもの方が自我の発達が進んでいること

が示された。

(3) - 1 - 3 2018年時点での三人称の使用と自我の発達との関連

2018年に自分の呼称として三人称を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした三人称自称詞使用有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を小学校低学年、小学校高学年、中学校の各時期において行った。幼児期においては三人称を使用しない人数が少なく統計的検定が行えなかった。小学校低学年においては(Figure 18)、自我の主効果のみ有意であった(F(2, 62)=4.58, p<.05, 根気我慢>自己主張)。小学校高学年においては(Figure 19)、自我の主効果が有意であった(F(2, 56)=13.27, p<.01, 根気我慢>情動抑制>自己主張)。また、時期の主効果も有意であった(F(1, 28)=8.60, p<.01, 2017年<2018年)。さらに、三人称使用の主効果が有意であった(F(1, 28)=6.10, p<.05, 三人称有>三人称無)。

以上のことから、小学校高学年では、2018年時点で自分の呼称として三人称を使うか否かと2017年と2018年の時点の自我の発達との関連が示され、三人称を使う子どもの方が自我の発達が進んでいることが示された。

(3) - 2 一般的自称詞の有無と自我の発達との関連

(3) - 2 - 1 2016年時点での一般的自称詞の使用と自我の発達との関連

2016年に自分の呼称として一般的自称詞を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした一般的自称詞使用有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期、小学校低学年の各時期において行った。なお、小学校高学年、中学校については、一般的自称詞を使用しない人数が少なく、統計的検討が行えなかった。幼児期においては(Figure 21)、自我の主効果が有意であった(F(2, 90)=4.90, p<.05, 根気我慢>情動抑制)。また時期の主効果が有意であった(F(1, 45)=7.63, p<.01, 2017年<2018年)。加えて自我×時期の交互作用が有意であった(F(2, 90)=4.94, p<.01)。小学校低学年においては(Figure 22)、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

以上のことから、2016年時点で一般的自称詞を使用するか否かと自我の発達との関連は示されなかった。

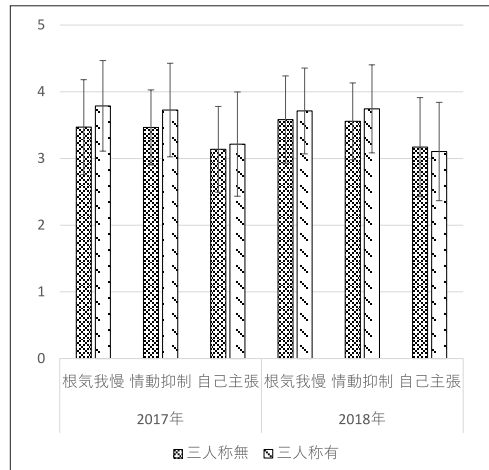


Figure 17 2017年三人称の有無と自我3側面(中学校)

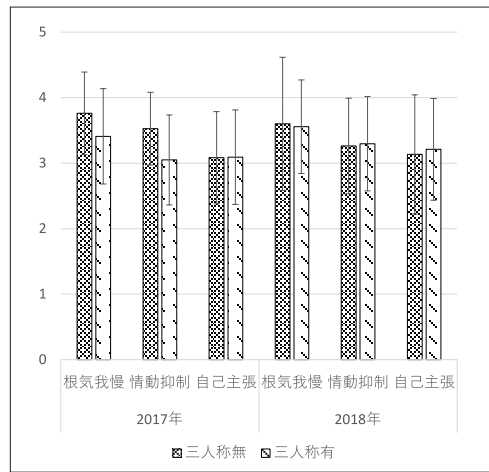


Figure 18 2018年三人称の有無と自我3側面(小学校低学年)

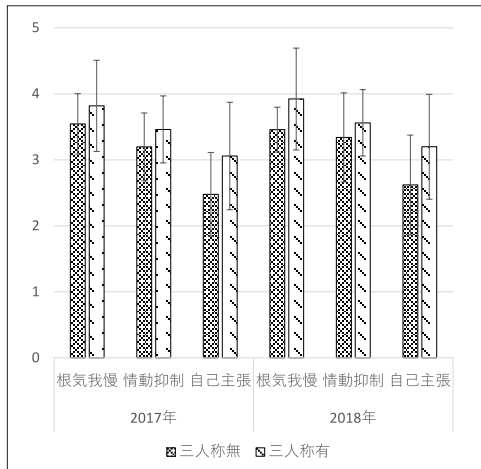


Figure 19 2018年三人称の有無と
自我3側面（小学校高学年）

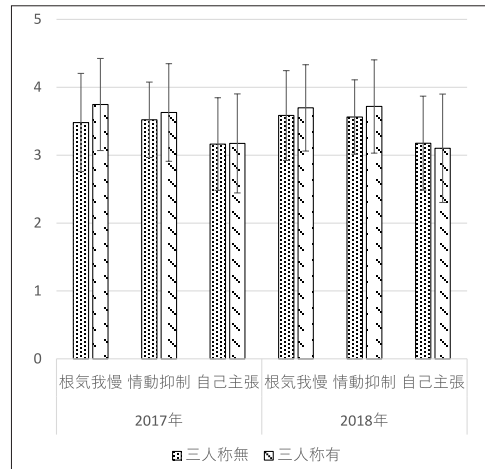


Figure 20 2018年三人称の有無と
自我3側面（中学校）

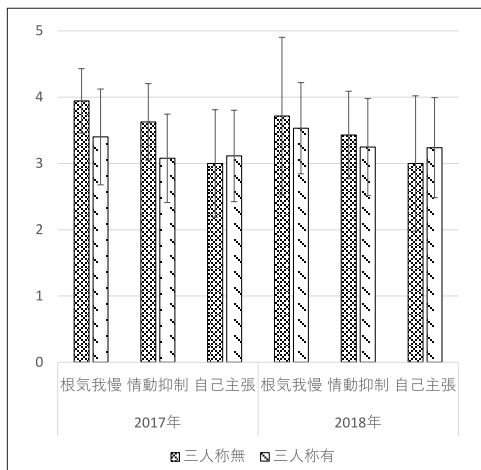


Figure 21 2016年一般的自稱詞の
有無と自我3側面（幼児期）

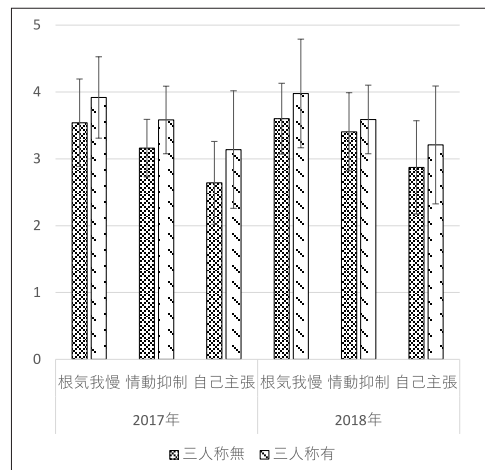


Figure 22 2016年一般的自稱詞の
有無と自我3側面（小学校低学年）

(3) - 2 - 2 2017年時点での一般的自稱詞の使用と自我の発達との関連

2017年に自分の呼称として一般的自稱詞を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした一般的自稱詞使用有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期において行った。なお、小学校低学年、小学校高学年、中学校については、一般的自稱詞を使用しない人数が少なく、統計的検討が行えなかった。幼児期においては(Figure 23)、自我の主効果が有意であった($F(2, 90) = 5.70, p < .01$, 根気我慢 > 情動抑制)。加えて時期の主効果が有意であった($F(1, 45) = 6.71, p < .05$, 2017年 < 2018年)。また、時期×自我の交互作用が有意であった($F(2, 90) = 4.95, p < .01$)。さらに、一般的自稱詞の主効果が有意であった($F(1, 45) = 4.41, p < .05$, 一般的自稱詞有 > 一般的自稱詞無)。

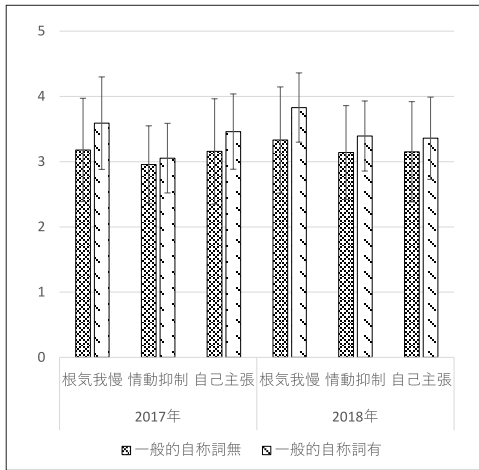


Figure 23 2017年一般的自称詞の有無と自我3側面（幼児期）

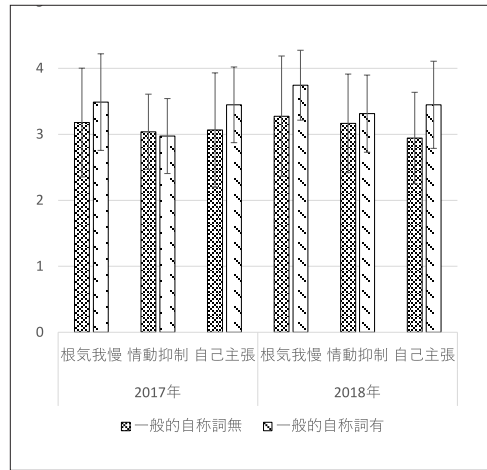


Figure 24 2018年一般的自称詞の有無と自我3側面（幼児期）

以上のことから、2017年時点で一般的自称詞を使用するか否かと自我の発達とは幼児期にのみ関連が示され、一般的自称詞を使用する子どもの方が使用しない子どもよりも自我の発達が進んでいた。

(3) - 2 - 3 2018年時点での一般的自称詞の使用と自我の発達との関連

2018年に自分の呼称として一般的自称詞を使用するか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした一般的自称詞使用有無(2) × 時期(2) × 自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期において行った。なお、小学校低学年、小学校高学年、中学校については、一般的自称詞を使用しない人数が少なく、統計的検討が行えなかった。幼児期においては(Figure 24)、自我の主効果が有意であった ($F(2, 90) = 4.33, p < .05$, 根気我慢 > 情動抑制)。加えて時期の主効果が有意であった ($F(1, 45) = 5.13, p < .05$, 2017年 < 2018年)。また、時期 × 自我の交互作用が有意であった ($F(2, 90) = 4.15, p < .01$)。さらに、一般的自称詞の主効果が有意であった ($F(1, 45) = 4.13, p < .05$, 一般的自称詞有 > 一般的自称詞無)。

以上のことから、2018年時点で一般的自称詞を使用するか否かと自我の発達とは幼児期にのみ関連が示され、一般的自称詞を使用する子どもの方が使用しない子どもよりも自我の発達が進んでいた。

(3) - 3 自称詞の使い分けの有無と自我の発達との関連

(3) - 3 - 1 2016年時点での自称詞使い分けの有無と自我の発達との関連

2016年に相互作用相手に応じて自称詞を使い分けるか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした自称詞の使い分けの有無(2) × 時期(2) × 自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期、小学校低学年、中学校の各時期において行った。なお、小学校高学年では使い分けをしない人数が少なく、統計的検討が行えなかった。幼児期においては(Figure 25)、自我の主効果が有意であった ($F(2, 90) = 5.16, p < .01$, 根気我慢 > 情動抑制)。加えて時期の主効果が有意であった ($F(1, 45) = 6.60, p < .05$, 2017年 < 2018年)。また、時期 × 自我の交互作用が有意であった ($F(2, 90) = 4.54, p < .05$)。小学校低学年においては(Figure 26)、自我の主効果が有意であった ($F(2, 62) = 3.92, p < .05$, 根気我慢 > 自己主張)。中学校においては(Figure 27)、自我の主効果が有意であった ($F(2, 254) = 13.70, p < .01$, 根気我慢 > 自己主張)。

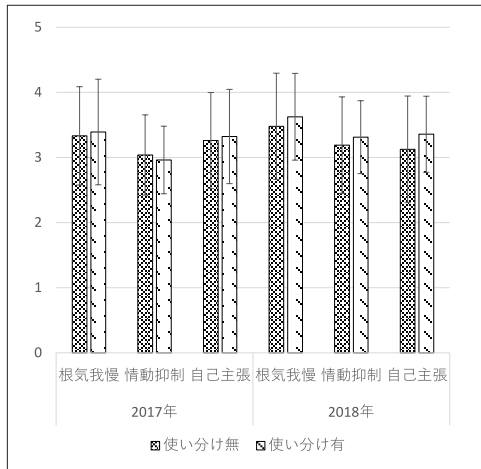


Figure 25 2016年自称詞使い分けの有無と自我3側面 (幼児期)

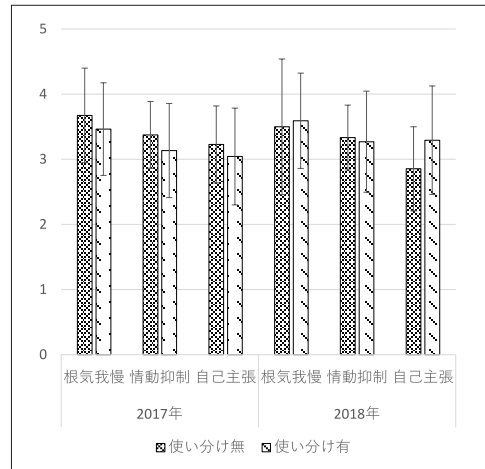


Figure 26 2016年自称詞使い分けの有無と自我3側面 (小学校低学年)

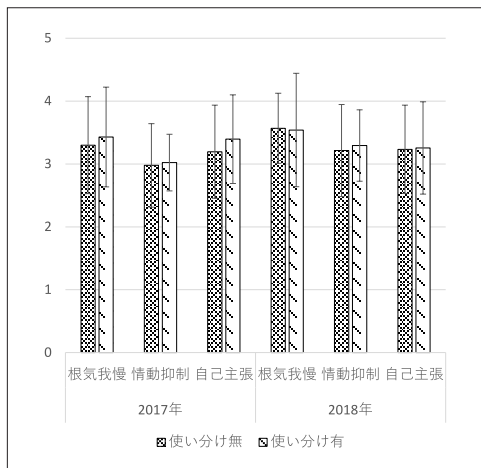


Figure 28 2017年自称詞使い分けの有無と自我3側面 (幼児期)

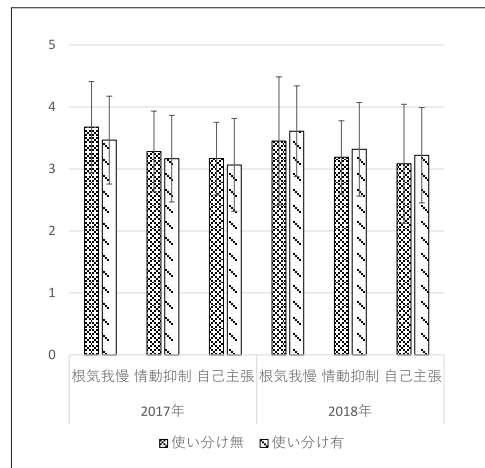


Figure 29 2017年自称詞使い分けの有無と自我3側面 (小学校低学年)

以上のことから、2016年時点で自称詞の使い分けをするか否かと自我の発達との関連は示されなかった。

(3) - 3 - 2 2017年時点での自称詞使い分けの有無と自我の発達との関連

2017年に相互作用相手に応じて自称詞を使い分けるか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点での自我3側面の評定値を従属変数とした自称詞の使い分けの有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期、小学校低学年、小学校高学年、中学校の各時期において行った。幼児期においては(Figure 28)、自我の主効果が有意であった($F(2, 90) = 5.16, P < .01$, 根気我慢 > 情動抑制)。加えて時期の主効果が有意であった($F(1, 45) = 6.52, 2017年 < 2018年$)。また、時期×自我の交互作用が有意であった($F(2, 90) = 4.64, p < .05$)。小学校低学年においては(Figure 29)、自我の

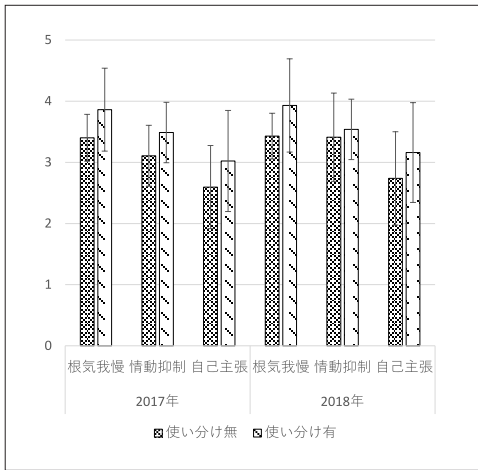


Figure 30 2017年自称詞使い分けの有無と自我3側面（小学校高学年）

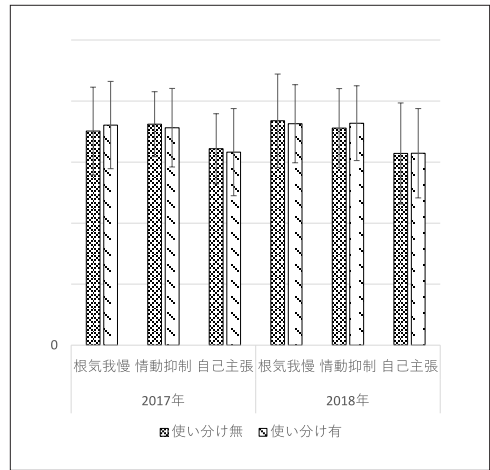


Figure 31 2017年自称詞使い分けの有無と自我3側面（中学校）

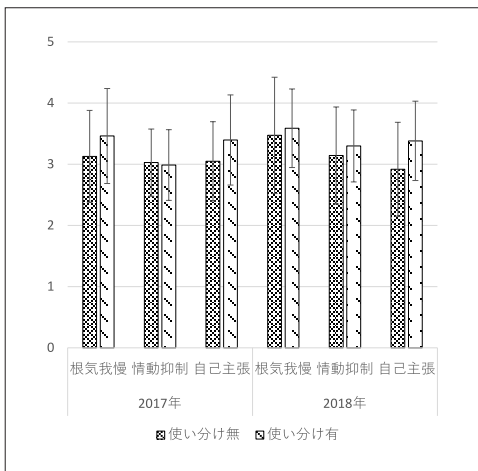


Figure 32 2018年自称詞使い分けの有無と自我3側面（幼児期）

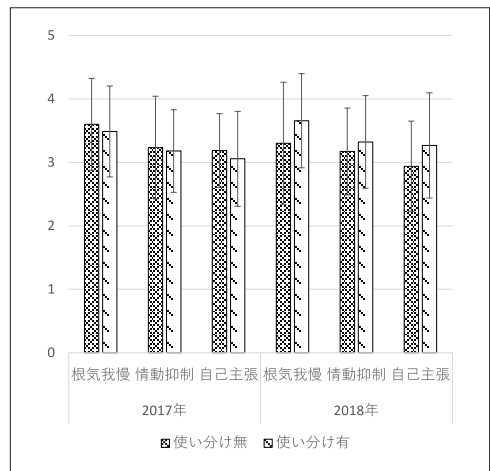


Figure 33 2018年自称詞使い分けの有無と自我3側面（小学校低学年）

主効果が有意であった ($F(2, 62) = 3.48, p < .05$, 根気我慢 > 自己主張)。小学校高学年においては (Figure 30), 自我の主効果が有意であった ($F(2, 56) = 9.47, p < .01$, 根気我慢 > 自己主張)。加えて時期の主効果が有意であった ($F(1, 28) = 6.89, p < .05$, 2017年 < 2018年)。さらに自称詞の使い分けの有無の主効果が有意であった ($F(1, 28) = 4.78, p < .05$, 使い分けを有 > 使い分け無)。中学校においては (Figure 31), 自我の主効果が有意であった ($F(2, 254) = 13.53, p < .01$, 根気我慢 > 自己主張)。

以上のことから、小学校高学年でのみ、自称詞の使い分けをする子どもの方が使い分けをしない子どもよりも自我の発達が進んでいることが示された。

(3) - 3 - 3 2018年時点での自称詞使い分けの有無と自我の発達との関連

2018年に相互作用相手に応じて自称詞を使い分けるか否かを独立変数とし、2017年と2018年の各時点

での自我3側面の評定値を従属変数とした自称詞の使い分けの有無(2)×時期(2)×自我側面(3)の3要因反復測定分散分析を幼児期、小学校低学年、中学校の各時期において行った。小学校高学年は使い分けをしない人数が少なく、統計的検定ができなかった。幼児期においては(Figure 32)、自我の主効果が有意であった($F(2, 90) = 3.88, p < .05$, 根気我慢 > 情動抑制)。加えて時期の主効果が有意であった($F(1, 45) = 4.92, p < .05$, 2017年 < 2018年)。

さらに自我×時期の交互作用が有意であった($F(2, 90) = 4.56, p < .05$)。小学校低学年においては(Figure 33)、有意な主効果、交互作用は示されなかった。中学校においては(Figure 34)、自我の主効果が有意であった($F(2, 254) = 15.81, p < .01$, 根気我慢 > 自己主張)。

以上のことから、2018年時点で自称詞の使い分けをするか否かと自我の発達とは関連が示されなかった。

IV 考察

本研究は、幼児期、小学校低学年、小学校高学年、中学校の各発達時期において、3年間に亘る縦断的データを検討した。その結果、以下の4点が明らかとなった。

第1に、幼児期3年間は三人称を使って自分を呼び表す子どもが圧倒的に多く、その後その割合が減少していくが、中学校になっても一定割合存在し続けることが示された。このことから、自分の名前やニックネームなどの三人称が自分の呼称として通用する社会的風潮の存在が示唆される。自称詞の獲得は三人称から一般的自称詞へと一方向に直線的に進むものではなく、一般的自称詞を獲得した後にも時には三人称が自称詞として容認され、後述するように場面や対話相手によって柔軟に使い分けされるものであると考えられる。

第2に、一般的自称詞の使用については、幼児期に顕著に使用者が増えた後、小学校低学年では目立った変化がないが、小学校高学年で再度使用者の増加傾向が示唆され、中学校になるとほぼ全ての子どもが一般的自称詞を使用することが示された。この結果は、幼児期については、子どもたちは2歳過ぎから主に自分の愛称(三人称)を名乗って他者との区別を明確にし(西川, 2003)、3歳頃から三人称で呼ぶのをやめ一人称代名詞を用いるようになる(Wallon, 1956/1983)という先行研究の知見と大筋で合致するものの、本研究の対象者の方が一般的自称詞の使用の開始が遅かった。その理由については、時代や文化による違いなどの原因が考えられるが、今後の研究が必要であろう。また、小学校高学年で、一般的自称詞の使用者の割合が変化する傾向が見られたことは、社会的比較や役割取得の発達との関連を示唆していると考えられよう。

第3に、自分の呼称を場面や相手によって使い分ける人数は幼児期でのみ違いが見られ、年長児クラスが年中児クラス・年少児クラスのいずれよりも人数が多いことが示された。このことは、幼児期後期に心についての理解が進み、自他の区別が明確になり、役割取得の能力が発達していくためであると考えられる。

第4に、自称詞の獲得と自我の発達との間に関係があることが示されたが、発達段階によって両者の関連の仕方や程度が異なっていた。三人称の使用に関しては、小学校高学年では、3年間を通して各時点で三人称を使う子どもは三人称を使わない子どもよりも小学校5年生・6年生の時点で自我の発達が進んでいた。また、一般的自称詞に関しては、幼児期では、年中児クラスと年長児クラスで一般的自称詞を使用する子どもの方が使用しない子どもよりも年中児クラス・年長児クラスで自我の発達が進んで

いた。自称詞の使い分けに関しては、小学校高学年では、5年生の時点で自称詞の使い分けをする子どもの方が使い分けをしない子どもよりも5年生・6年生の時点で自我の発達が進んでいた。

これらをまとめると、まず幼児期では三人称だけではなく一般的自称詞を獲得し使用するようになることが自我の発達と関連していた。幼児期には自他の区別の明確化や言語発達、他者視点の獲得などが一般的自称詞の獲得を促進すると同時に、自我の発達にも寄与していると考えられる。小学校高学年の時点では反対に三人称を使用する方が自我の発達が進んでいる一方で、同時に自称詞を使い分けることもまた自我の発達と関連していた。小学校高学年では、思春期に向けて再度自我の発達が進み、自己に焦点化して三人称を使用する現象となって現れるのと同時に、役割取得も進むために自称詞の使い分けになって現れると解釈できよう。

以上の結果は、これまで縦断的及び広範囲の年齢に亘って検討されることがなかった自称詞の獲得を明らかにしている点、自称詞の獲得と自我の発達との関連性を示した点で意義があると考えられる。

今後の課題として、自称詞の獲得や使い分けの変化と心の理解の発達との関係の検討が挙げられる。心的用語の使用の有無によって聞き手が話し手に対して形成する印象が異なる (e.g., 長田, 2010, 2013) という研究結果や、自称詞の獲得・使い分けと自我の発達との関連を示した本研究の知見に基づき、さらなる検討が必要である。

文献

- 長田瑞恵 (2010) 自称詞の違いと印象形成 - 発話者の性別・年齢との関連 -, 計量国語学, 27 (6), p.233-242.
- 長田瑞恵 (2013) 心的用語の使用が聞き手の発話に与える影響 - 疑似対面状況における説明課題を用いて -, 日本教育心理学会第55回総会, 法政大学.
- 原田知佳・吉澤寛之・吉田俊和 (2008) 社会的自己制御 (Social Self-Regulation) 尺度の作成, パーソナリティ研究, 17, 82-94.
- 西川由紀子 (2003) 子どもの自称詞の使い分け: 「オレ」という自称詞に着目して, 発達心理学研究, 14(1), 25-38.
- Wallon, H. (1983) 『身体・自我・社会』(浜田寿美男, 訳編) 京都: ミネルヴァ書房. (Wallon, H. (1956). Niveaux et fluctuations du moi. L'Evolution psychiatrique. I.)

付記

本研究にご協力いただきました方々に心から感謝申し上げます。本研究はJSPS科研費 JP16K04267の助成を受けたものです。